

ポスターセッション

幼児の博物館活動「ちこあそ」がつなげる新しい輪

滋賀県立琵琶湖博物館 中村久美子

琵琶湖博物館では、2016年9月から新たに幼児（未就学児）を対象とした博物館活動を月1回平日に実施している。ちっちゃなこどもの自然あそび（ちこあそ）として、屋外展示の森を拠点に生き物、食べ物など衣食住を含めた活動をしている。幼児が自然体験できる場として始めた活動であるが、数年継続する中で、親同士の交流の場としても機能してきており、ちこあそという博物館活動が、特に幼児期の環境教育活動の機会を広げる場となる可能性について議論する。

科学館に本を～体験＋本で広がる科学の学び

多摩六都科学館 原 朋子

科学を学ぶ際、日常とはかけ離れた時間・空間的スケールの現象や生物の1年の変化など、その場での体験が難しい事柄も多い。そこで科学の本、特に科学絵本の力を借りることで、理解の助けとなる想像力を養い、また本をきっかけに興味の範囲をより広める・深めることができる。本発表では、地域の読み聞かせの会^{*}と行う子ども向けの科学絵本の読み聞かせと実験のワークショップや教室や展示の現場での本の活用、地域図書館とのブックセレクションなど、多摩六都科学館が以前より取り組んでいる「本と科学をつなぐ活動」について紹介する。

※科学の本の読み聞かせの会「ほんとほんと」

科学館での理科学習と連携した児童生徒及び保護者を対象にした観察・実験プログラムの実践

出雲科学館 中山慎也

出雲科学館では出雲市内の小中学校と協働で理科学習（正規の授業）を実施しています。その実施と完全にタイミングを合わせて『レベルアップ☆サイエンス』という児童生徒向けの観察・実験プログラムを社会教育の一環として開催しています。また、理科学習の内容を、児童生徒の保護者や一般の大人を対象に行う『大人のための理科学習』も新たに企画し、実施しています。学校教育と連携したこれらの社会教育の教室例を科学系博物館のみなさんへ紹介します。

「かはくのモノ語りワゴン」の紹介 ～「^{モノ}標本」から生まれるコミュニケーション

国立科学博物館 相沢 紗百合
小室 綾
園山 千絵

国立科学博物館では、常設展示室内に移動式のワゴンを設置し、実物の標本などを用いて来館者に展示に秘められたポイントなどを紹介する「かはくのモノ語りワゴン」という事業を2016年から実施しています。実演は館で活動するボランティアが行い、実演時間は約5分で、小さな子どもから大人まで気軽に参加でき、外国からの来館者にも対応可能となっています。今ある博物館の資源（人・モノ）を活用して実現した、一つの新しいコミュニケーション手法を紹介します。

地域を振興する博物館活動 — ジオパークとの連携で広がる可能性

千葉県立中央博物館 平田 和彦

地域資源を題材とした研究・教育を使命とする公立博物館と、地域資源の保全・活用により地域の持続可能な開発を目指すジオパーク。科学的見地から市民の愛郷心や地域への関心を育む両者の理念や活動には共通点が多い。千葉県立中央博物館と銚子ジオパークは、展示や講座、観察会など幅広い取り組みにおいて盛んに連携している。本発表では平成30年度の事例を紹介し、公立博物館が地域振興に果たす役割と効果について議論する。

学習プログラムと事業点検の ノウハウを学び合う実践的研修の重要性

札幌市青少年科学館 木野 翠

多様化する社会のニーズに対し科学館がミッション達成のためにどのような視点が必要なのか、また、よりよい事業を行うための企画のポイントや自己評価の進め方など、これからの科学館に求められる取り組みについて考える研修を道内のさまざまな科学館とともに開催した。

各館の教育プログラムの情報共有の機会を設けたり、科学館に必要な評価のあり方を考えるグループワークを行うなど参加者同士の学び合いに重点を置いた研修について紹介する。